

特251

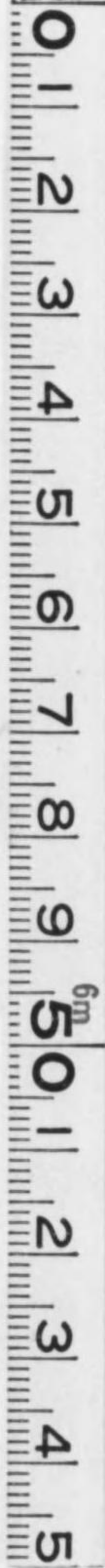
338

402

542

大日本山林會  
第四十回大會

山口縣視察旅行案内



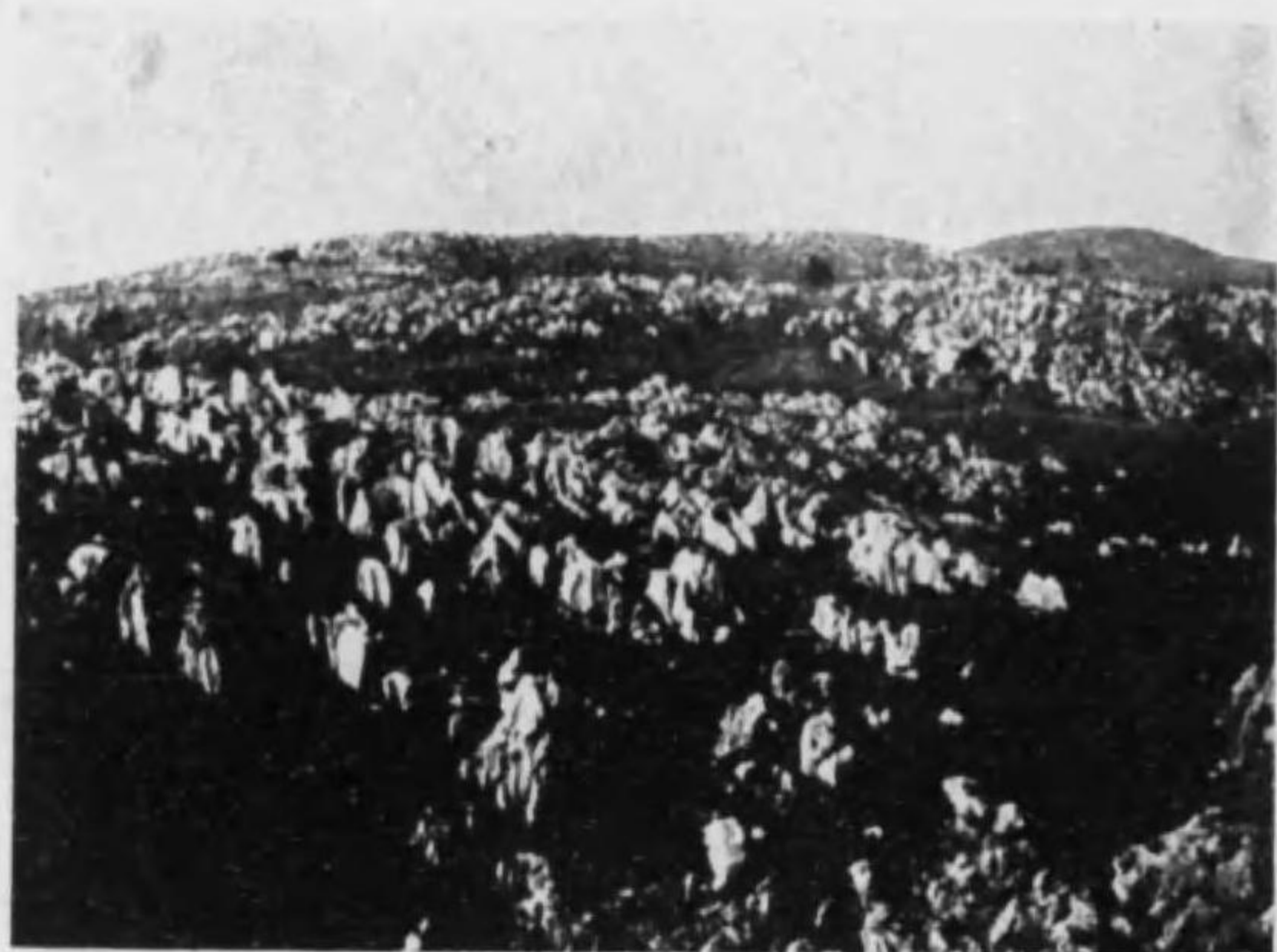
始



338

542

特251  
402



(上) 秋吉灘カーレン・フエルド  
白き岩石は石灰岩にして  
草原一望數里に亘る



(中) 長門峽の龍宮淵と風致保安林



(下) 錦帯橋と城山國有林



(上) 山口市街大観



(中) 史蹟松下村塾  
維新の志士吉田松陰の私塾に  
して當時の儘保存せらる



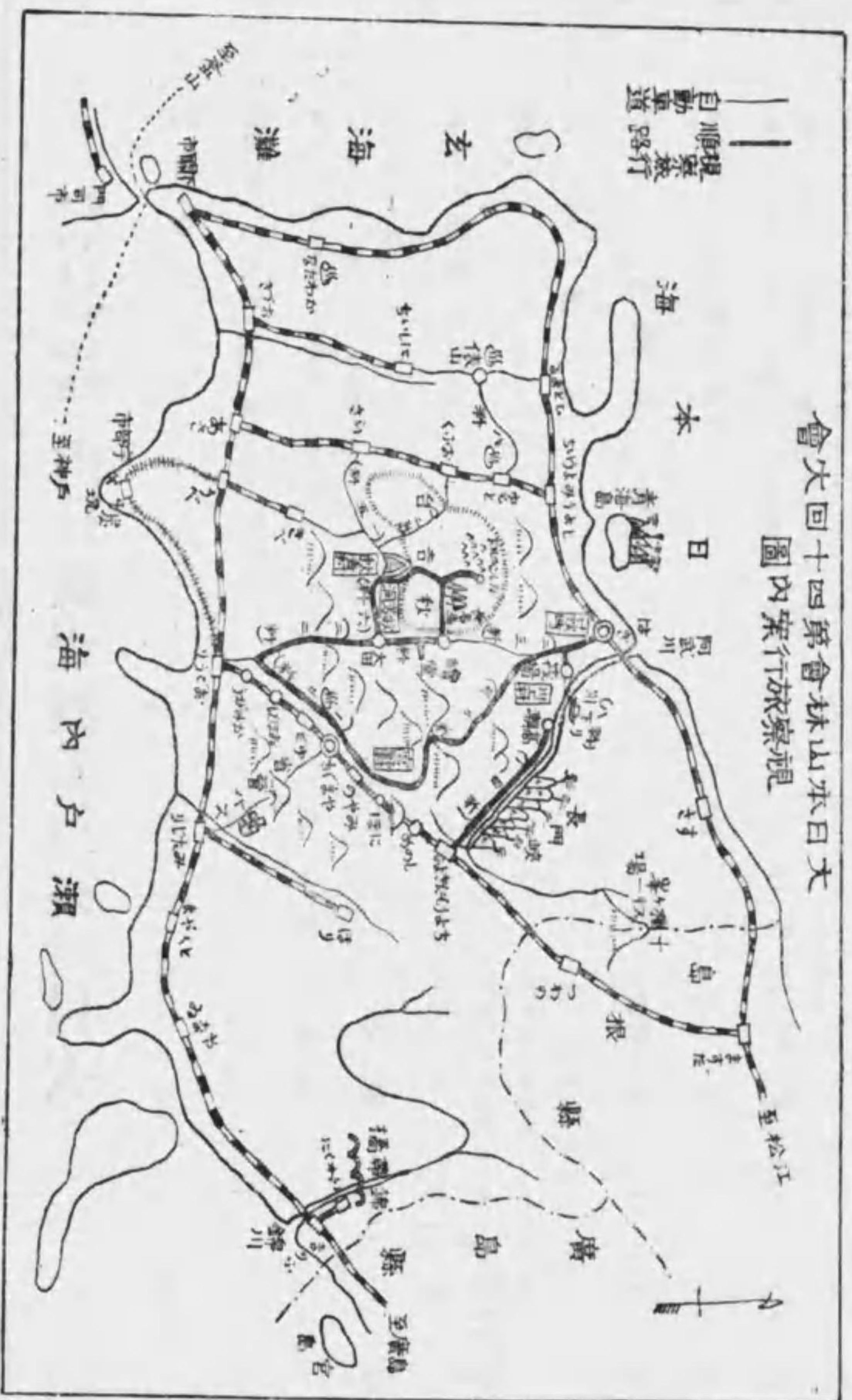
(下) 萩町、明神池風致保安林  
明神池は噴火口跡にして湧水は常に沸水と噴流し、  
湖の干涸により池にも干涸あり、池中に海魚ありて  
飼育を興ふれば恒も遊魚の如く争ひて計難なり。

大日本山林會  
第四十回大會  
山口縣視察旅行案内目次

- 一、山口縣の概要……………一
- 二、世界第一の大鐘乳洞「秋芳洞」……………二  
洞内——青天井——千枚皿——高棧敷——南瓜岩及  
び千町田——草づくし——流の化石と岩屋觀音——  
黄金柱——黒谷
- 三、天下の奇勝秋吉臺……………六  
曠原のオアシス——長者ヶ森——地獄谷
- 四、長登戰蹟……………九
- 五、太田町金麗社……………九
- 六、峡谷美の名勝長門峽……………九  
長門峽開發の徑路——丁字川——千瀑河口——樺ヶ  
淵——舟入——紅葉橋——龍宮茶屋——山峽の温泉
- 七、阿武川下り……………三  
地、湯ヶ瀬——切瀬、切窓の絶景——川上村高瀬部落
- 八、川上村の林業……………三
- 九、維新の都萩……………四  
林業上より見たる萩——萩の史蹟名勝——明倫館——  
松陰神社、松下村塾——松陰幽囚の舊宅——伊藤博  
文公舊宅——吉田松陰の誕生地——護國山東光寺——  
指月公園——越ヶ濱明神池——笠山
- 一〇、萩町に於ける製簾工場……………一九
- 二、釣竿工場……………二〇
- 三、宮野村の林業……………二〇



大日本山林會第十四回大會  
國內旅行案內圖



## 大日本山林會 第四十回大會 山口縣視察旅行案內

### 一、山口縣の概要

山口縣は本州の最西端に位し、周防・長門の二國を管し三市十一郡より成る。東北は石見・安藝の二國に接し、其の餘の三面は海を廻らす。就中、東は安藝の多島海を隔て、伊豫に對し、南は周防灘に面して遙かに豊前・豊後を望み、明媚なる風光到る所に展開し、世界の公園と稱せらる、瀬戸内海の西部支關たるを失はず。西は響灘に沿ひ、怒濤逆捲く玄海の波浪は岸を洗ひ、遙かに朝鮮と對し、下關より僅かに八時間にして釜山と連絡す。西北は日本海の紺碧を湛へ、岸壁の雄、千古の松風、潑瀾たる魚介の躍鱗と共に是又壯絶襟を濯ぐの景勝に乏しからず。

地形概して東西に伸び、東北方より走下する中國山脈は廣島・山口・島根の三縣界に於て縣下第一の高峯寂地山(一、三三八、九米)を聳立せしめ、續いて縣下の雄、羅漢山・平家嶽等の峻山を抱有しつゝ、西に走り、周防・石見の境をなし、遂

に周防・長門の境に至りて縣の中央部を西南方に走り、其の間方便山・桂木山・一位ヶ嶽・天井ヶ嶽等の峻山を聳立せしめ、時に廣漠たる秋吉臺の平原を形造り遂に下關小門岬に盡く。河川は流長二〇軒を超ゆるもの二十四を算するも、一〇〇軒を超ゆるものなく、概ね流域狭少。従つて平坦地に乏しく、山脈帯を除くの外は、大小の丘陵起伏し、僅かに諸川の長實に一、二〇〇軒、其間下關・萩・宇部・三田尻・徳山・柳井津等の港灣に富み海運頗る開けたり。陸地の中央部は春梁山脈をなすも、交通を阻害する事少く、南方海岸線に山陽本線を、北方海岸線に山陰本線を通じ、陰陽連絡の諸線好く發達し、交通概して至便なり。

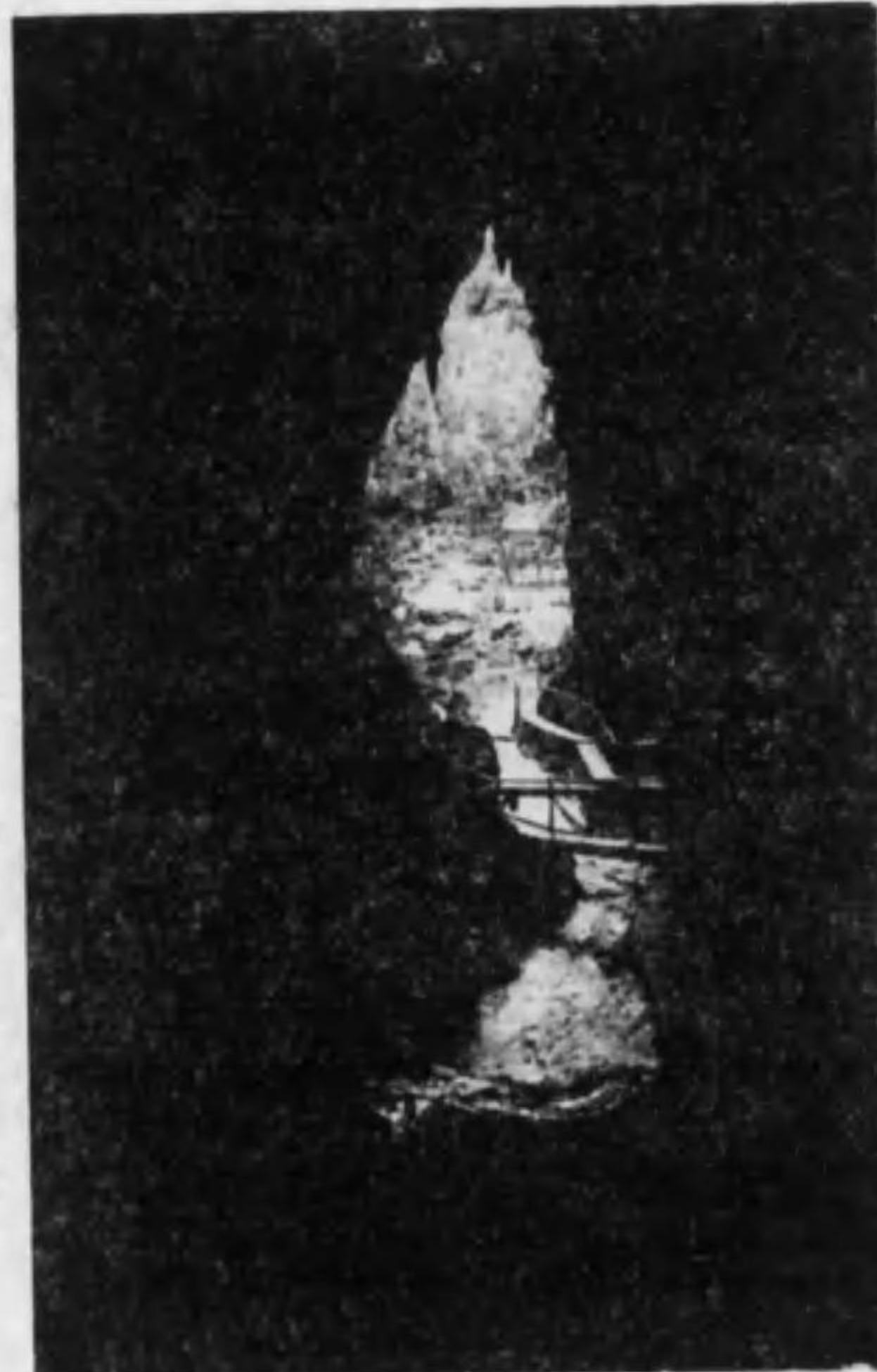
氣候温暖、海陸共に産物に富み、頗る豊饒の地なり、廣袤六、〇七五平方軒、山林は其面積六割五分を占め、瀬戸内海沿岸丘陵地帯に於ける一部類廢山地を除くの外は、松・樅・椎・竹等の暖帯樹種に富み、林産物の生産額約一、〇〇〇萬

# 秋芳洞内概略圖



洞入口より黒谷まで 九六〇米  
洞入口より琴ヶ淵まで 一九〇〇米

- 園に達し、林業は縣下産業の中層たり。
- 總面積 六、〇七五平方軒(六〇七、六八六ヘクタール)
- 人口 一、一三五、〇〇〇人(密度一方軒一八七人)
- 年生産額 二二、〇一一萬圓
- 林産額 八八〇萬圓
- 林野面積 三二二、九〇
- 一、二ヘクタール
- 國 有 四、六一八、六
- ヘクタール
- 公 有 一〇七、五七
- 二、五ヘクタール
- 社寺有 三、〇九九、二
- ヘクタール
- 私 有 二〇、五八〇
- 〇、九ヘクタール



秋芳洞内より黒谷を眺む

に因み秋芳洞の名を賜はる。同年十一月十一日には開院宮、昭和二年二月二十七日には久邇若宮、同四年四月十四日には梨本宮各殿下御探勝の榮を負へり。

洞内廣潤にして地下流は或は瀧となり、或は淵となつて洞床を流れ、夏季は切に冷風を吐出し、冬期は濛々たる濃霧を出すのが爲めに、甚だ凄然たる光景を呈し、二十餘年前迄は洞口附近は一面鬱蒼たる林叢に鎖され白晝晦冥を覺え、往時より里人が恐れて近寄るものなく、唯夏季旱天の際、雨請ひの場所として稀に使用したる

## 二、世界第一の大鍾乳洞

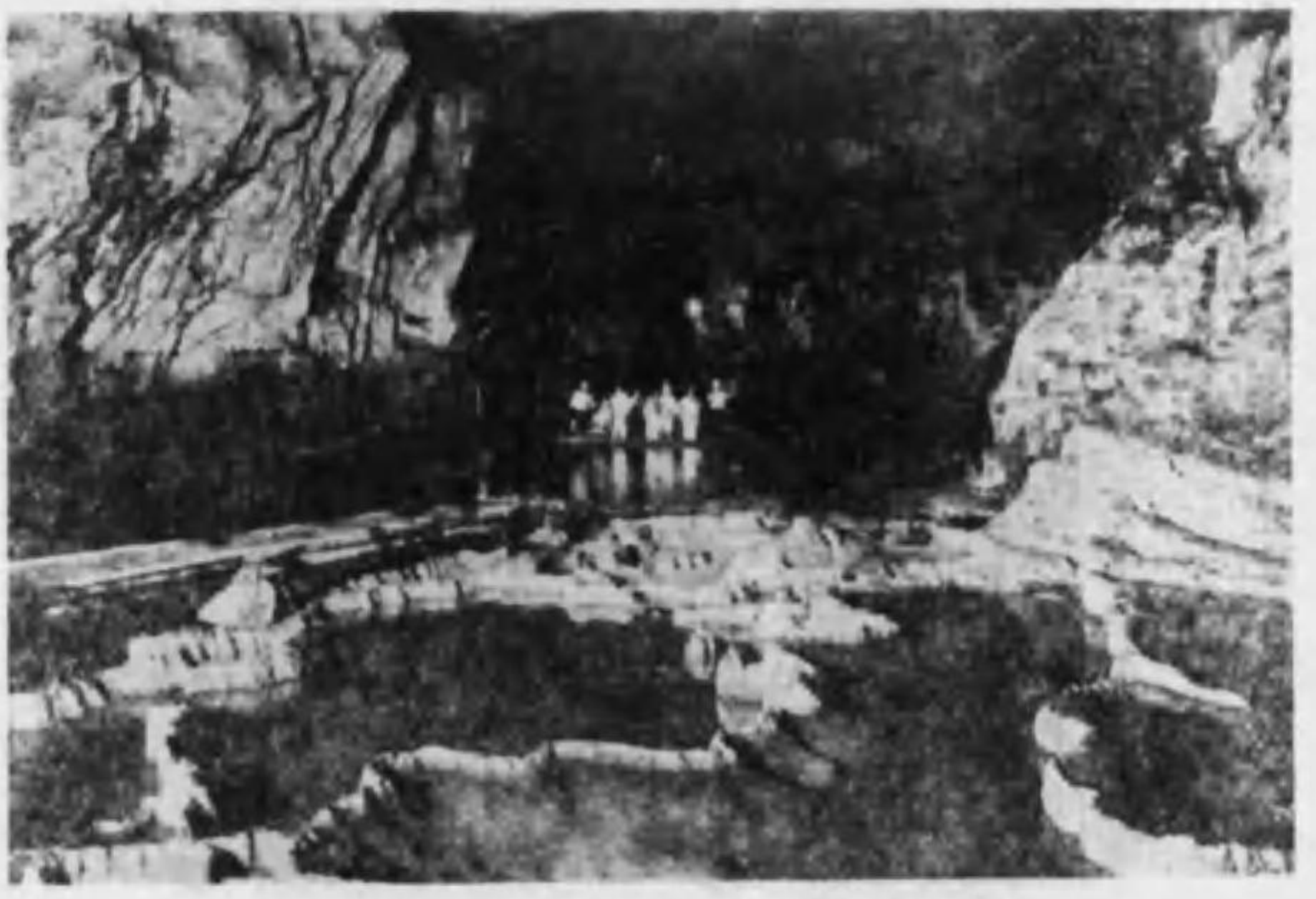
天下の奇觀と稱せらるる秋芳洞は美禰郡秋吉村に在り。本邦無比の大石灰洞窟にして舊名は瀧穴と呼ばたり。大正十一年三月八日、史蹟名勝天然記念物保存法に依り、天然記念物として指定せられ、同十五年五月三十日、聖上陛下未だ東宮に在せしとき洞内深く御探勝遊ばされ、御感斜ならず、村名

に過ぎざりしといふ。洞内は所により廣狭あり、幅廣きは百六十米突を超ゆる所あるも、平均六十米突内外、高さは最高八十米突餘あるも、平均三十米突内外なり其の探勝區域は洞口より奥一九〇〇米、普通は九六〇米突なる黒谷の口(地獄とも云

ふ)を終點とす。

本洞口の南方に自住寺と呼ぶ曹洞宗の一古刹あり、寺傳に依れば、正平九年初夏、此の地方大に旱魃し、稻苗緑色を帯ぶ同寺の開山大洞壽圓、新雨の爲め、本洞内に近き所に行場を設け、雨を祈りしが、満願日に近づき降雨の如く降り、洞内より出水夥しかりしかば壽圓遂に溺死して、洞内より吐出する稻川に流れ出づ、里人之を知り大に驚き惜しみ悲しみ、壽圓の遺骸を茶毘に附し佛師をして其灰を練りて像を造らしめ、今に同寺に傳ふと云ふ。爾來大旱魃に當つては此の佛像を洞口に遷して請雨するを例とす。

本洞が世人に認めらるに至りし蓋は明治三十七、八年の頃、英國人にして山口高等商業學校の教授たりしがントレット氏が洞内を探索し、長淵に舟を寄附してより漸く觀覽者を生ずるに至れり、其の後同四十一年、大阪時事新聞記者が洞内、地獄の底の探検をなし、次で四十米許にして孤狀を爲し、宛ら圓形劇場の高棧敷の如し。此の洞廣島高師の中目教授は地下流の幹線を遡り水源地方面を發見



(洞芳秋) 場し渡の淵長

し、初めて本洞の全範圍を知るに至れり。實に洞内は雄大な奇觀の連続にして筆舌のよく盡す所にあらざるを以て茲には要所の概説を爲すに止む。

洞口 大絶壁の麓に當り、洞口は東方に向つて口を開く、其形狀略々鳥帽子狀を呈し、高サ二四米突、幅八米突あり。流水滔々として四段の淵を造り、龍宮淵と呼ぶ深潭に吐出せり。殊に大降雨の際には驚くべき水を出し、水聲簾々として洞の内外に反響して物凄く、絶壁には樹木密生し、蔓草之れに絡まり、南天・橘・枇杷・棕桐等の暖地性植物自生せり。

青天井 洞口に近き廣場にして、洞口より射入する光線が流水と、純白なる天井に反影し、青味を帯ぶるにより此の名あり。天氣晴朗なる午前中が最も佳景なり。此の附近は水面より天井迄の高サ八十米なり。天井には大小の鐘乳石密生懸垂し、奇觀を呈す。

千枚皿 石灰華の奇形を呈するものにして、其の侵蝕狀況極めて珍奇なるものなり。高棧敷 洞床水平となり、幅一米、長さ

て懸結せられ恰もセメント混凝土の如し。

南瓜岩及び千町田 共に石灰華の面白く發達せるものにして、千町田は階段狀をなせる山間の水田狀を呈せるものにして、此の中には眼の痕跡なき「ミヅナカ蟲」棲息せり。

傘づくし 洞の天井より長さ二米突内外の鐘乳石が數十本懸垂し、宛ら傘屋の店頭、傘を天井より吊下げたるが如きより此の名あり。傘づくし附近の洞壁には石筍と鐘乳石と相接合したる數本の石柱あり打てば堂々たる響を發するものあり

淵の化石と岩屋觀音 淵の化石は空淵とも呼ぶ。高さ十米許なるも、是れは炭酸石灰を含有する水が、岩壁上を流れ落ち、永き年月を變して石灰を沈澱し遂に淵の水勢を其儘化石せしものなり。

岩屋觀音は洞窟壁の小穴内に新しき小石筍起立し、其形狀觀音像に似たるより穴觀音とも呼ぶ。此の中に大正十四年八月、電燈點火以來發生生育せる「ホラシノア」、*「シ、カシラ」*等の隱花植物類が發生繁茂するを見る。之は石灰岩の間をくゞりて地上より水に依りて運ばれたる胞子が電光のみにより發芽生長せしものにして植生上面白き現象なり。

黄金柱 洞内第一の壯觀にして、世界の石灰洞中有數の大石柱な



(洞芳秋) し 畫 傘

り。其の直徑八米、高さ二十八米にして天井より一直線に垂下す。元石柱面に沿うて水流れ篝火を映じて宛ら黄金柱の如きより此の名あり。此の附近には蝙蝠多く棲息し、其の糞夥しく堆積せり。尙此のあたりにも電光に依りて生ぜる「ヨモギ」「アレサノギク」「シ、カシラ」「ホラシノア」等の植物發生せるを見る。

黒谷 黄金柱の奥にして普通探勝者の終點とし、洞口より正に九六〇米、鐵鎖を傳ひて上れば洞床深く陥落して地下に通じ、其奥を知らず、脚より冷風吹來り凄慘たる光景を呈す、曾て此處に下りし人あるも未だ奥深く探究したるものなし。

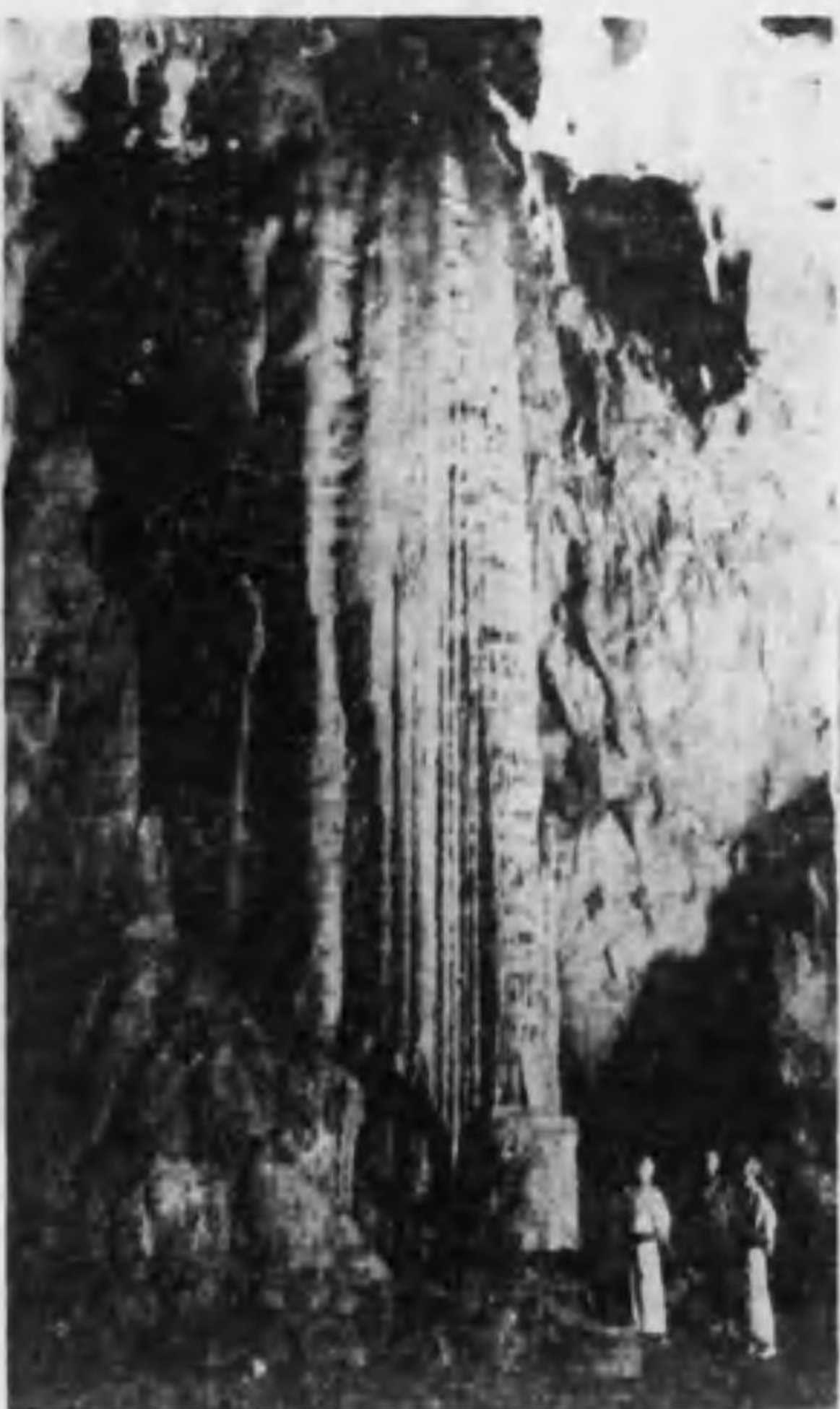
以上の外、水源地方を探るには、燈火を準備して千町田附近より右に分岐して更に九〇〇米を廻らざるべからず。此の間、須彌山・賽の河原等の名所あり。琴ヶ浦に至り水流は大岩壁の麓より吐出し、一步も進む能はざるに至る。本水流はこれより約八軒の北方赤郷村白漁洞口に至るまで未知の地下流となり、鯉・鮒・ハへの魚類此の地下流中に棲息し光線なきため永年の内に色を失ひ白色を呈すといふ。

洞内の探勝を卒へ洞口に戻り、晴天白日に浴する時、初めて生氣を得る感あるは何人も味ふ處なり。洞内視察の所要時

間は約一時間半、要するに秋芳洞は探勝によりて初めて想像に優る大自然の偉力、其の壯嚴、雄大なる神技に打たれざるものなるべし。

### 三、天下の奇勝秋吉臺

秋芳洞を地下に蔵する一體の茫漠たる曠野を秋吉臺と謂ひ、日本最大のカルスト(Karst)地帯にして、長門國美禰郡の北半部に於て大約東西十六軒、南北十二軒の廣大なる地域を占め、大田・伊佐・赤郷・秋吉・共和・別府・於福・大嶺・岩永



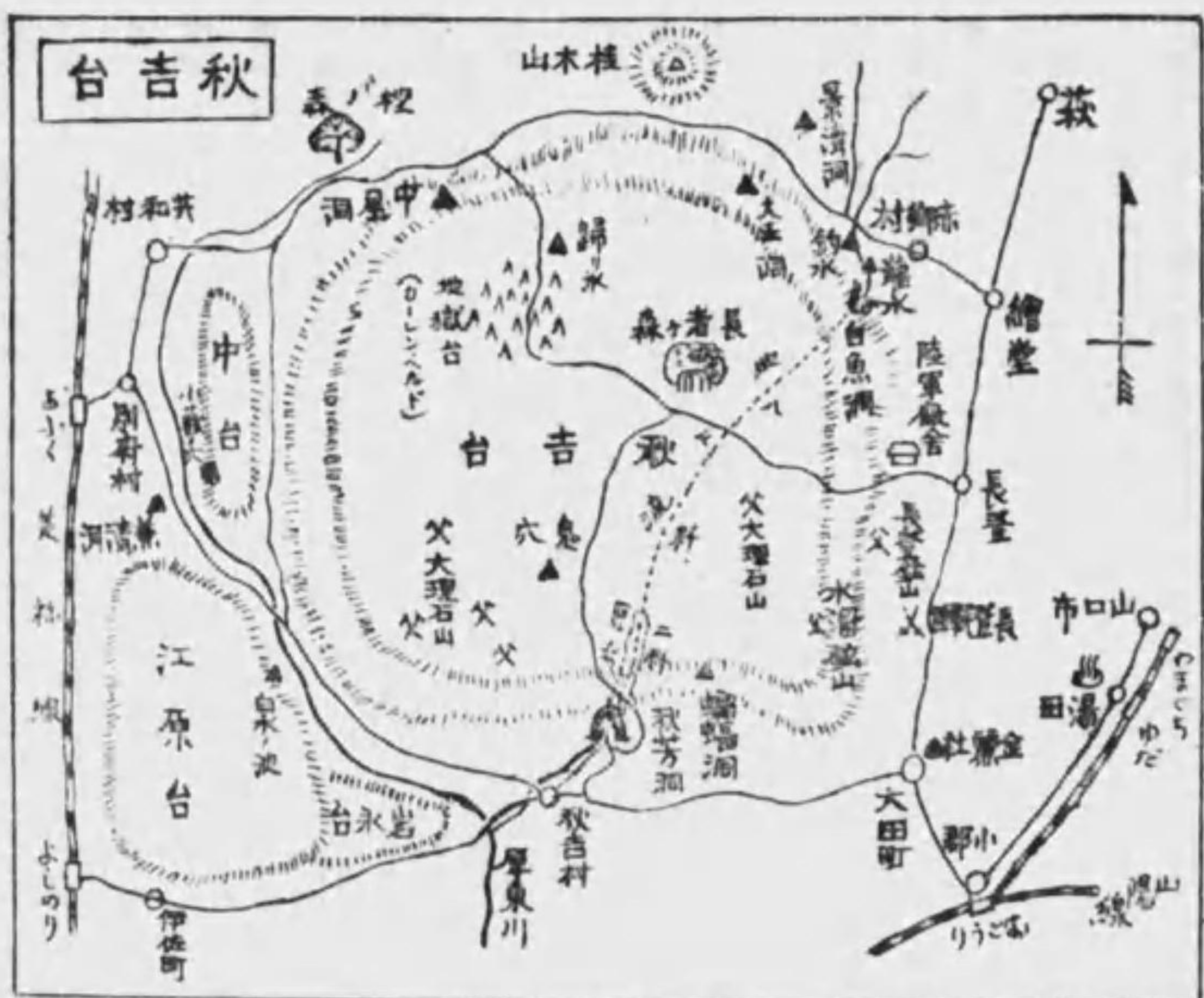
(洞芳秋) 柱 金 黄

殺の變動に伴ひ迸發岩の作用に依り、又は他岩層を以て臺地の地貌に變化を與ふる所多し。

臺地は往昔に於ては海底に略々水平に生成せしものならんも其後海底隆起して陸地となり、偉大なる地變力を受け、或は永年月の間斷なき水蝕作

の二町七ヶ村に跨り、海拔約四〇〇米突、臺地の畧中央部に厚東川の上流(周防灘に注ぐ)之を南北に貫流し、臺地を東西に二分するが故に、狹義に於て東部なるを秋吉臺、西部なるを江原臺及岩永臺とも呼ぶも、一般には之を秋吉臺と總稱せり。

用に依りて石灰岩層の風化を來たし 到る所に石灰洞窟の天井陥落して地表に播鉢狀の地形を作れる窪地(地質學上之をドリネ Doline と稱す)及びドリネの連續したる地溝帯(地質學上之をウヴァレ Uvalle と稱す)ボリエ(Polje) 往時流水を吸込みたるポノール(Ponor)洞窟・地下流・湧泉・カレンプエ



ルド(Karrenfeld)等を完全に表はし所謂カルスト地貌發達す臺地の地表は石灰岩が永年間、著しき水蝕作用を受けその分解生成したる殘滓土たる赫土(Terra Rossa)を以て厚く被覆せらる。

石灰岩は迸發岩の接觸作用を受け、各種の接觸礦物を表はし、或は種々の鑛床を造るにより、臺地を繞りて古來有名なる鑛山多し。奈良東大寺大佛の鑛鋼材料は本臺地の一部なる長登鑛山より出したるものなりといふ。

又臺地の迸發岩に近き所に於ては、到る所に大理石の採掘場ありて、美術大理石として伊太利産マーブルに劣らざる吉野櫻・綿紋・更紗・紫雲・黄荒目・葡萄荒目・純白荒目・霞等優美なる紋目を有する原石を多量に産出す。新築中の帝國議會議事堂有關は本臺地産大理石を使用せしものなりといふ。本臺地關係地方一圓にて其の産額一ヶ年間一、四一七萬貫、金額大約四十萬圓の原石を産出す。

本臺地に散在する無数のドリネ・ウヴァレ・ボリエ等の底部は土壤肥沃にして肥料を用ふることなくして作物を栽培するを得べく、窪地なるも、雨水は吸込穴より地下に注下して地下流となるが故に水を停滞することなし。此ドリネ・ボリエの大きさは多種多様にして直径數米突のものより大なるは七十

除戸の一部落を包含するものもあり。

秋吉臺下には到る所多數の洞窟ありて枚舉に遑あらざるも、特に有名なる秋芳洞・景清洞・大正洞・中尾洞・白魚洞・兼清洞・姥の穴・蝙蝠洞・龍宮洞・小藪の穴・松原洞等にして、就中初めの四洞窟は天然記念物として内務省の指定を受けたり。

曠原のオアシス長者ヶ森 長蛇の如き草原道の中央には、本臺上唯一のオアシスたる長者ヶ森があり、元來臺山は其の大部は關係町村の公有林にして、内一、七〇〇ヘクタールは大正十一年より十七ヶ年間の契約を以て陸軍省に貸付せしもの、之が賃貸料は一ヶ年間五、一五一圓にして之を各町村に分配す毎年春期の候火入を行ひ樹木の繁殖を防ぐ。然るに此の草原には千振草と稱する藥草（胃腸病藥）繁茂し、附近の小學校兒童をして毎年之を採集せしむ、其量一萬貫、金額二千圓に上るは驚くべし。

長者ヶ森は約二段歩許りの小面積なるも野火に強き各種の樹木叢生し、アフリカ沙漠のオアシスに彷彿たり傳へ云ふ今より凡そ三百年前長者が住居し、氣品高き上藪を置き、



秋吉臺長者ヶ森附近の展望

豪者なる生活を営みたりといふも、眞實は關ヶ原戰爭により關ヶ原の領土を有せし毛利公が、防長二州の小國に閉塞せらるゝに及び食糧問題解決の一方策として、かゝる臺地にまで住居を奨励し、蕎麥の栽培をなせしもの、如く、長者ヶ森は其の住居の跡なりといふ。

長者ヶ森より遠く臺中諸所を展望するに、老松の點在するを見る、これは凡そ三百年前の事ならん附近の里人、五郎平衛と稱する人、臺上にて人々道を迷ひて困難するを救はんが爲、道しるべとして各方向別に目標たるべき標を植栽せしものなりといふ。後世その徳を讃へ此の松を五郎平衛松と稱す。

地獄臺 長者ヶ森の北方二百米突條を距る所に地獄臺あり。面積約五十町歩、こは秋吉臺上に於けるカルスト現象の最も顯著なる所にして、様々の形狀を爲す石柱林立す、その高さ二・三米又は四米に達するもの少からず、其數二十數萬本に達し、尖々として地獄の「針の山」を推想せしむ。

此の石灰岩は總て「フズリナ蟲」の遺骸より構成せらるゝが故に、石柱の破片には明瞭に此化石を見らる。又この附近には自生桃の林をなす箇所あり、花に桃色のものと白色

なるものもあり。

地獄臺一帯は昭和三年二月、天然記念物として内務省より指定されたり。

#### 四、長登戦蹟

長登は秋吉臺の麓太田町に在り、元治元年十二月十六日高杉晋作、馬關に正義の旗を掲げ、翌慶應元年正月、山縣狂介（山縣有朋）を先鋒として俗論黨の軍と大いに此の地に戦ひ、遂に正義派の勝利に歸し、晋作等進んで萩城に入り、是より維新回天の鴻業を翼替するの端を開きしといふ山緒の地なり。

#### 五、太田町金麗社

戦蹟を過ぎ數分にして太田町に着く、町の入口橋を渡れば袂に金麗社鎮座す。繪堂長登の戦ひに際し、山縣狂介（有朋）こゝに本營を敷き、敵の逆襲に備へ、各々髪を切つて神前に供へ以て必勝を祈りしといふ。後明治維新の新政となり、山縣公が廟堂に立つに到り度々萩に歸郷の途、必ず此の戦蹟に寄られ金麗社に詣りて、禮拜久しうせられるを常とせり。同境内公の碑文は亡き傑士の感慨を深からしむ。

金麗社境内の傍らを流るゝ金麗河は其の堤上櫻の並木にして金麗

河畔の櫻として太田名所の一つなり。

太田町は萩・小郡間の中途に位し、石灰岩の風化土壌よりなる深層の表土を有するが故に牛蒡の生産地として知られ太田牛蒡と稱し毎年其の産額三萬貫、九千圓を産出す。

#### 六、峡谷美の名勝長門峽

山口驛發上り列車に乗込み、防長國境の大トンネルを通過すれば車輪の廻轉スピードを加へる、約一時間にして長門峽驛に達す。是れ中國隨一の景勝、長門峽の入口なる御堂原なり。

本峽は阿武川（日本海に注ぐ）中流一帯の地域にして、其延長は洗心橋畔より下流幹道三里、支道十六町、別に三里餘を距て、漣溪の一區域を包括する絶勝の地にして、全峽を分ちて五區とす。即ち東長門峽・西長門峽・生雲溪・金郷溪・漣溪にして、所謂長門峽とは之等峽谷の總稱なり。

長門峽は堅牢なる石英斑岩の侵蝕谷にして本邦到る所に勝景の地在るも、石英斑岩より成る豪壯雄大なる奇勝が斯くも長く長く續けるものは獨り本峽あるのみなり。峽内には川岸に斷崖絶壁を表はし、其麓には階段狀浸蝕の跡を遺し、川床には深潭及び罅穴を造り、瀑布、奔瀉相續き、傾斜緩かなる





所には奇岩基布して岩角を水面に表はす等、千變萬化の景勝を展開す。加ふるに兩岸岩壁を縫ひて森林鬱蒼として茂り、針潤混浴林を形成し、峽趣を貴からしむ。春の芽立ち、夏の濃緑、降霜の初期は山も谷も鏡の如き深淵も見渡す限り満目紅錦の美を飾り、本峽獨特の光景を呈す。峽流中には鮎あり、鯉あり、鱒あり、鰻あり、又往々鶯鶯の碧潭に遊ぶあり、林間には樹梢を戯る、群猿を見るべく、峽内人煙を見ず。到る所岩石美と、水流美と、鬱蒼たる森林美と、峽谷が描くスカイラインとの交錯にして、眞に天下の絶景たり。かゝる得難き景勝地なるも其所有關係殆んど民有林にして森林伐採のため風致の破壊せらるゝもの屢々なるに至り。これが伐採を禁止し其の風致を保存せしめんがため大正十二年四月三十日農林大臣に依り、其兩岸森林三〇八町六畝七歩を擧げて風致保安林に編入せられたるものなり。

**長門峽開發の徑路** 本峽は古來より傳統的神秘地として知られ、これに近寄るものなく、全く不明の地なりしなり。傳ふる所に據れば、要害の地たる萩に本城を有する萩藩は軍略上、本峽谷に里人の入るを禁止、若し入るものあるときは途中之を要殺して天狗のわざなりとして宣傳せしめ、人恐れて近寄るものなきに至らしめたものなりといふ。明治三十年頃陸軍測量部此地方を始めて測量し、本峽地形の詳細を知り得たり。其後明治四十一年阿武川水電發電用水

調査中、其技術者が峽内を撮影して始めて世に紹介したり、同四十四年英國人「ガントレット」氏本峽を詳細に探り、山口地方に紹介するに至り探勝者漸く多きに至りたるも惜哉、峽内路なく、容易に人の近寄り得べき所ならざりしが、大正九年故高島北海畫伯、之を探勝し、探勝道路開設の必要を説き名づくるに門峽を以てし、揮毫の畫百六十幅、此の金額一萬五千五百圓を擧げて探勝道路開發費に充て、大正十年完成を見た。次いで大正十二年山口縣廳林務官に依つて詳細なる調査を遂げられ、風致保安林に編入され續いて名勝地として指定を受け今日に至りたりものなり。

**丁字川** 長門峽の入口たる洗心橋を渡りて最初の景勝にして、東西兩方面よりの水流が直角に合流せる處にして地質學上興味あるもの、學說によれば約二十萬年前、附近一帯は火山作用のために陥落し湖水を爲せしが其後に起れる地變のため大斷層をなし丁字川より長門峽の大裂溝を作りしものなりといふ。

**千瀬洞** 丁字川を下りて暫く平穩なりし兩岸は、こゝに於て斷



長門峽風致保安林

然一變し豪壯雄大なる奇景と化す。此の入口附近西岸より下流を風致保安林編入區域とす。奔瀾「馬の瀾」の上に聳ゆる大峭壁は威風堂々として天空を摩し、高架棧道、橋の上より下流を望めば多數の奔瀾及瀑布あるを以て、稱して千瀬洞口と呼ぶ。

**權ヶ淵** 此の附近狹谷の展望廣く屈指の奇觀を呈す、此の附近谷間より曾て多數の樺の木材を伐り出せし事あるにより此の名ありといふ。

**舟入** 巨岩が深潭中に突出し、頂上平坦數十株の松樹繁り、規模大ならざるも愛すべき風景なり。舟入の下流對岸に當り階段狀浸蝕の好例たる「懸壇」と稱する所あり。此の附近路傍の岩石は裂罅より冷風を吐出し、夏期探勝者を慰むる所なり。更に怪・楡・雜木林の林間美を味ひつゝ下れば「大谷淵」に出る。此所は延長一町餘の碧潭にして四隣の風光と相俟つて頗る幽邃なり續いて類の棲息するといふ「淵淵」を過ぎ、「鈴ヶ茶屋」に到る。

茶屋附近の川中は擴大し奇岩重疊する邊り岩石の節理を検するに最も好し、小憩後茶店を後に「高島洞」と稱する洞門をくゞりて進む。洞門入口の對岸に「大瓶穴」あり學者は此の瓶穴の發達狀況、

大きにより、浸蝕の年数を大要窺知し得ると云ふ。こゝより昔時杵夫が薪材を流下するに困難せしといふ「和留瀬」(悪瀬の意)猪の渡渉路たりしといふ「猪渡り」等あり。

紅葉橋 岩壁の間奔流の上に架す長さ二十三間の「サスベシ」シ・アリアツヤ」にして支溪たる「生雲溪」の入口なり。「生雲溪」には「暗り瀧」、「飛渡の瀧」等の奇景あり。「紅葉橋」附近秋期紅葉の候は映中第一の美観なり。橋畔なる「北海洞門」を通過更に下れば第一・第二・第三「断魚瀧」に達す。此の断魚瀧に鮎・鱒・鯉等の下流よりの遡上を助くべく瀧の横側に岩石を削りて階段状の魚梯を設置せるは注目に値すべし。

龍宮茶屋 第三断魚瀧の下流は直ちに「龍宮瀧」となり、龍宮茶屋あり、こゝにて小龍宮瀧の鯉を愛するも面白し。此の附近に其昔僧雪舟畫聖の閑居せし舊蹟あり、彼の端座にして剛勢なる雪舟派の繪畫も、恐らくは本峽に多大のヒントを得しめしものならん。山峽の温泉地、湯の瀧 下ること約三十分にして湯の瀧に到る温泉ありて清遊に適す、この附近に「大天狗」、「小天狗」、「牛の首」と稱する屹立せる奇岩あり。



切瀬切窓の絶景 峽谷の最後を飾る景色にして、支流を合流したる處、縣管水電の堰堤によりて静寂紺碧の湛水は雲表四百五十尺、水邊に屹立せる切瀬、切窓と稱する岩柱を投影して奇觀を呈せり。此附近、群猿の樹上に喜々として戯るを見るべく更に此處より支流を訪へば「金郷溪」の奇勝あり。

川上村高瀬部落 切窓の景を下ること二里半、阿武川に面せる山間の小部落にして、彼の壇の浦の戦に敗れて、茲に逃避せし平氏一族の後裔なりと云ふ。此地は杉松等の用材、薪炭材、其他の林産物を出し、また鮎の名所なり。

### 七、阿武川下り

高瀬より川舟に依り阿武川を下り萩に出づるを阿武川下りと云ふ。蓋し保津川木曾川下りの痛快味はなきも、同時に危険性なきは安心なるべし。河床坦々として水流緩やかに舟中一獻を傾けつつ身を水流に委せて下れば、兩岸の岩角、孤岩の上に並列せる無数の野生龜は吾人を送迎し、或は舟音人聲に驚きて岩上より水中に落下するも亦味多き

遊舟の標標峽門長

興趣なり。

兩岸一帯の地は所謂、川上林業と謂はるる山口縣下唯一の林業地にして、地味豊沃、水運の便宜しき爲め古より林業發達し全材殆んど杉、檜の造林地を以て覆はる。

### 八、川上村の林業

川上村は日本海岸の開港場萩港より、阿武川を廻ること約四杆の地に始まり、本村内を縦貫して長門峽に至るまで十六杆の間にして、阿武川の中流に位す。面積五方里、戸數七〇〇、人口三四〇〇の大村にして、村民の大部は林業を以て生計を營む。即ち土地の類別を見るに、田地二〇〇町歩、畑一八〇町歩、山林原野七、五〇〇町歩、その生産狀況は



長門峽標ケ瀧

林業生産二十五萬圓にして總生産四十九萬圓の五割二分を占め、農業生産これに次ぎ十三萬圓の二割六分、養蠶收入六萬の如く既に鎌倉時代の抑々川上の地は古へより林業地として天下に知られしもの

八千圓の一割四分にして、如何に本村が林業に與かる所大なるべきかを知るに足るべし。

而して今林業の大要を見るに村有林は其面積一九〇〇町歩を有し、施業計畫案を樹立し現に年々六〇町歩餘を輪伐し、一萬圓餘の年収入を擧げ、村財政を助くる事多大なり。村内を通じて杉、檜の人工造林地は大約二、〇〇〇町歩、檜の天然林一、六〇〇町歩、雜木林三、二〇〇町歩、竹林三〇町歩、無立木地(主として草刈場)五〇〇町歩にして人工造林の盛なる推して知るべし。而して杉檜は小丸太生産を目的とし、平均二十年乃至三十年、最も早きは十四五年生にて伐採し、川流しに依り薪市場を経て下關、九州、鮮滿、大阪方面に販賣せられる。

せしもの、如く。舊記にも見えたり。萩城より東南三里川上村に柚木谷といふ山あり杉の大板を出す」とあり、此の柚木谷は川上村内の一部落名なり。又新選六帖の光俊の歌に

長門なる阿武の郡の柚板は

もろこし人もすさめざりけり

とあるも恐らく此の地方の柚板を指せしもの、如く、川上林業の依つて来るの所以又近からずといふべきである。

阿武川下りの中途、河岸に内務省指定の天然記念物、「木樫の天然自生地」あり。

### 九、維新の都萩

長州萩は日本の近世史

に燦然たる人物と覇業を育んだ地にして、維新の萩は勤王を代表し、長州といへば萩のシノニムたりし事程左様に萩の歴史は萩の血脈たると同時に防長の肺腑にして、光輝ある日本勤王史の一部をなす。



長門峡がらく淵

尙誇り得べしといふべきなり。

#### 林業上より見たる萩

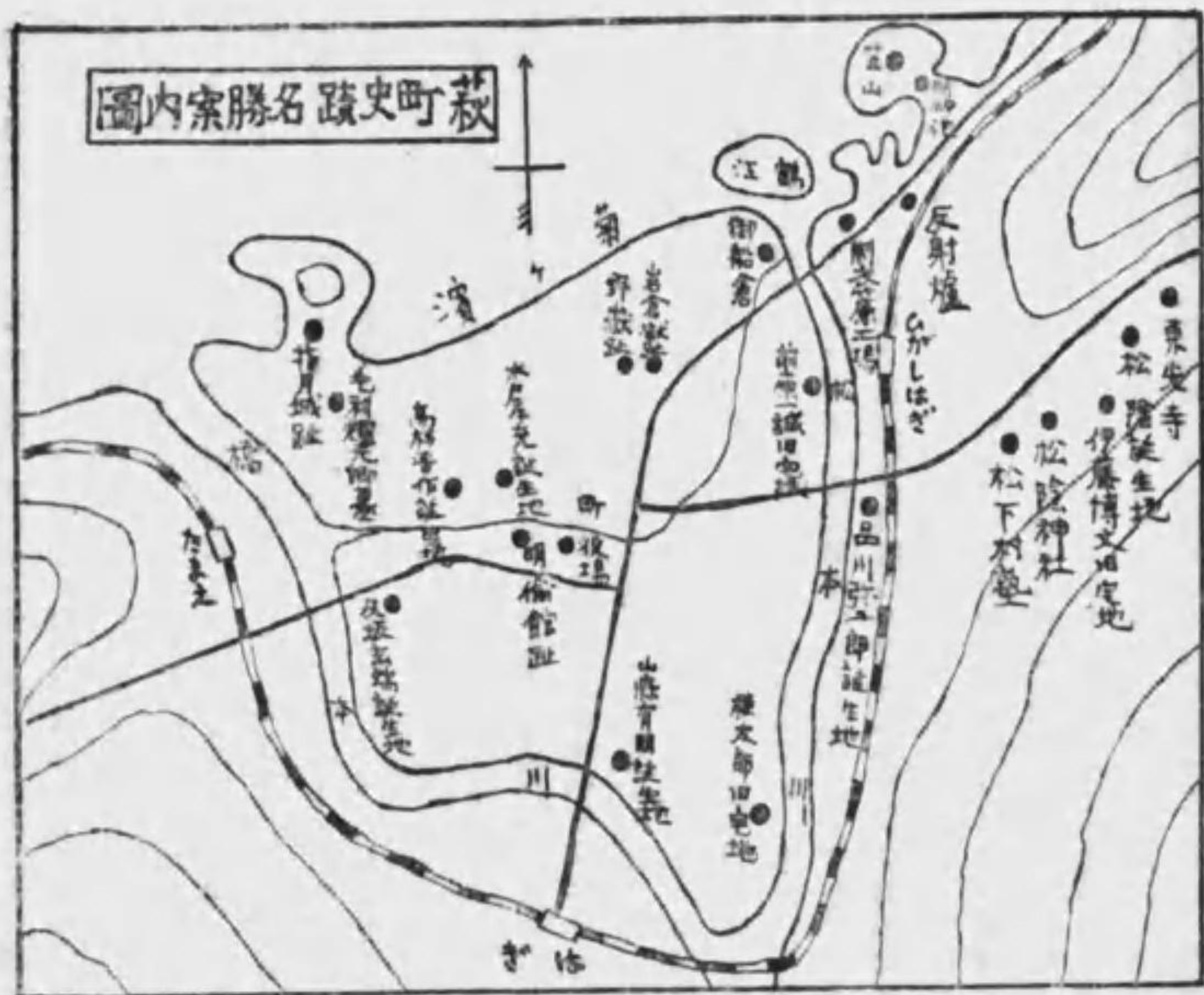
時代の流れは交通文化の発展に伴ひ一時寂れんとせし此の町は再び近代的産業都市として生氣を吹返さんとしつゝあり。昭和の萩は隣郡を合併し、面積五方

里、人口三萬三千、一ヶ年の生産総額七百萬圓に達し、中にも地の利を得たる水産業は其第一位を占め、次いで工場、農産、林産の順序なるも、竹林はその豊富なること縣下第一位にして、夏蜜柑、木材等と共に開港場としての萩港輸移出品の優位を占む。今これを数字に見るも昭和四年度に於て林産物は萩港輸移出品中其の金額二十九萬圓に達せり。就中外國輸出品としての竹材は林産物中斷然トップを切り開港場としての萩は林産物を以て成立すとも見らるべし。又萩町には町有林野一、一〇〇ヘクタール餘を所有し、現在既に年々其の伐採収入を以て経営事業費を償ひ得て餘りあり。萩は實に川上林業の門戸をなし、林産物の町、竹林の町、従つて竹材工藝の町としての特色を多分に有せり。

近く山陰本線の全通を機会に来るべき山陰の雄、昭和新興の大萩市として目醒ましき發展の途上を急ぎつゝあり。

萩の史蹟探勝を一々巨細に尋ねんには悠に十日間を費すも尙盡きざるべし。然れども茲には今回の視察旅行中に見聞すべき主要のものゝみに止めんとす。

明倫館 町の中央萩町役場に隣接して在り、現在町立明倫尋常高等小學校として使用されつゝある建物にして、享保三年藩主毛利吉元公の創建せしものなり。其後嘉永二年、毛利敬親公に至り現在の



地に改築せらる。水戸弘道館、四山閣各寮と共に日本の三館と稱せられ共に盛名を蒙り、長藩が明治維新の大業を翼賛するに至りし源泉は實に此の館の存在なりといふも過言にあらざるべし。

其の敷地一五、一八四坪に亘り、舊藩時代には規模安壯を極めたりしも、維新後漸く廢壊し、當時の遺物に僅かに源武場の一棟と、水練池二基の石碑並に聖廟の本主等を存するに過ぎざるは遺憾なり。水練池及二基の石碑は昭和四年十二月史蹟として指定せられ、殊に水練池は水中馬術・槍術の練習に用ひしものにして、日本最古のプールなり。

本館は小學部より大學部迄ありしもの、如く、又驚異すべきは洋學部を設け、好生館と名づけし教室にては醫學を授け、嘉永の昔既に解剖學・生理學・原病學・治法學・藥性學・舍醫學等の科目を教授し、又博習堂に於ては譯書諸科・兵學科・海軍科・砲術科等の科目を授け、又小學舎と稱し幼年兒童の教育場を設け、現今の幼稚園の如き制度を既に採用し、更に注目すべきは學校御殿と稱し藩主敬親公は其世子を學館内に起居せしめ、諸士の子弟は凡て本館内に寄宿舎を設け收容せし等、上下一致其學事に熱心なりしこと今日の學制を凌駕するものあり。萩が幾多維新の英傑を生みし豈又偶然ならざる感を深うす。

本館西方の入口には安政の頃、明倫館教官中島治平なる人長崎に到り、蘭人シーボルトに師事し、歸萩に際し西洋文化輸入記念樹として歐洲産オリーブを持ち歸り植栽せらるあり、現在毎年實を結び故人の事蹟を偲ばしむ。又同人は安政五年長崎より汽車を持歸り明倫館西方の路上に於て之を走らせ、藩公の見聞に供せしといふ。恐らく本邦に於て汽車を走らせしは萩を以て嚆矢とすべきならむ。

古雅なる生垣の屋敷地を鑑みて進めば二三分にして

**伊藤博文公墓** に至る。此の附近地名を松本権原臺と呼ぶ。夏蜜柑の茂る畑を廻らし古色蒼然、見るからに田園匹夫の住居らしき平屋建陋屋あり、これなむ明治の元勳伊藤博文公の舊宅ならしむとは。此の家屋は舊本藩の輕卒伊藤直右衛門の居室にして、安政元年父重藏夫婦と共に公は伊藤家の婿養子として入家されしものにして、公は始め近隣なる久保五郎左衛門の家塾に入り、後吉田松陰に師事せしものなり。現在公の父重藏氏が植置置きし神代樹は大樹となりて高く聳へ、慈母の朝夕祈願せられし小かなる石造の鎮守、公が毎朝水を入れかへられし牛糞の手水鉢も其儘に存し、在りし昔の眼前に沸々たるものあり。公が壯年に至り國事に奔走中、兩親に送られたる手紙は皆此の家宛てなりき。軒低き陋屋とは雖も、其の古びたる室内に、庭に、すゞろに偉人の幼時の偲ばれて流涙の滂沱たるものあり。舊宅の地續きに公の銅像建設せらる、其の手にせらるるは帝國憲法の草案にして公の一生涯を通じて最も得意の絶頂時代と云ふ

**吉田松陰先生の誕生地** 伊藤公舊邸の後方、小高き地に在り。権原臺と稱し、杉家の舊宅にして後方護國山の縁を湛へ、宅址に誕生地の碑、先生産湯の井の碑等があり、此の地環境廣闊にして靜閑、高臺なれば萩の城下一望の内に收まり、遠く日本海の蒼波を控へ、其の景色の悠大なる其眺望の壯快明瞭なる「天地正大氣。粹然、鐘、神州」……注、爲「大瀛水」洋々、環「八州」の氣慨自ら湧然たるを覺ゆ、吉田寅次郎此の地に生る、豈偶然ならん哉の想あり。

回顧する安政六年幕府藩に命じて松陰を江戸に拘致せしむ、同年五月二十四日杉氏宅にて親族一同に訣別し、翌二十五日萩を發足して歸らぬ旅に上りし當時、萩の城下もいよ／＼これにて見納め

松陰神社・松下村塾 明倫館より車を車に走らせ松本大橋を渡れば約五分にして松陰神社の眞前に至る。

松陰神社は言ふまでもなく贈正四位吉田松陰先生を祀る。清楚質朴なる社殿なるも其の人を思ひ其の事蹟を案するの時、訪ふ人誰か偉大なる暗示にむせばざるものあらむ。明治四十年伊藤博文・野村靖氏等其の遺徳を崇めて建設の勞を採られしものにして、安政六年五月二十五日松陰先生が萩の地を永訣せられ、江戸の獄に向はれし日を記念して毎年五月二十五日を以て祭日とす。低頭禮拜後社殿の後方に廻れば天下に名高き松下村塾あり。

大正十一年十月内務省より史蹟として指定せらる。塾舎は舊態を其儘に現存せる瓦葺、木造平屋建にして八疊と十疊半との二室を有する陋屋なり。安政三年七月より同五年十二月迄、僅々二個年半、松陰先生が屏居の身ながら子弟を教育せし所にして、かくも短日月の間に於て、此の小塾舎より幾多國家の偉人、傑士を輩出し、維新回天の鴻業を翼賛すべき原動力を造成せしか、唯々驚歎の外なかるべし。

「松下村塾なりと雖も誓つて神國の柱石たらん」の松陰の本懐は遺憾なく爲し遂げられたりといふべく、其の決心、其の自信、子弟を教ふるの信念實に偉大なりといふべきなり。松下村塾に東隣して**松陰園の舊宅** あり。人々はこゝに到つて恐らくは悲憤慷慨其の遺る所なき情熱を感じるならむ。松陰藩許を得て松下村塾に子弟を教養するに當り、論策謀議大いに計劃する所あるを知り幕府之を忌憚して遂に此の舊宅の内、三疊半の一室に先生を幽囚せしといふ。二十一回猛士の眞情果して如何ばかりなりしや。訪ふ者何れか故人を追想し時代を回顧し、低頭暫し去り得ざるべし。松陰神社横より

となるといふ最後の地にて

歸らじと思ひ定めし旅なれば

一入ぬる、涙松かな

の一首に斷腸の感慨を托せしといふ、今尙當時の涙松は萩の郊外に昔の縁を湛へつゝあり。

安政六年六月二十五日江戸藩獄に投ぜられ十月二十七日身三十歳の若年にして武蔵野刑場の露と消えし傑士の末路哀れといふべきなり。當時の別辭「親思ふ心に優る親心、今日の番訪れ何と聞くらん」、「身はたとひ武蔵の野邊に捨つるとも、留置がまし大和魂」の二句に至りては感慨無量である。

此の附近に吉田松陰・玉木文之進(乃木希典の叔父)・久坂玄瑞・高杉晋作等の菩提墓あり。

**護國山東光寺** 黄葉宗の禪林にして元祿四年毛利吉就公の創建に係り僧徒を開山とす。宇治の黄葉山を模擬した七堂伽藍を備へ結構壯麗、當時奥州の大佛寺、因州の興禪寺と共に日本三叢林と稱せられ西國の一大巨刹、毛利氏累代の菩提所たり。明治の初年廢藩の際其の大半は解除せられしも今尙昔日の佛を親ふに足るべし。本堂の後方森嚴なる山麓には毛利家累代の墓標あり、また毛利家の重臣烈士の墓碑も建設せられたり。反射爐海岸近き丘陵上に在り。伊豆叢山に於ける江川太郎左衛門遺業の反射爐と好一對をなすものにして史蹟として指定せられたり。

**指月公園** 毛利氏累代二百六十餘年間の居城たりし萩城の在りし所、堀江を渡り曲折せる城壁石垣の間を縫いて進めば、櫻樹茂き公園廣場に達す。正面の指月山は徑・権等常緑潤葉樹の老樹生茂り、當地方固有の暖帯林相を呈す。其の麓に指月神社あり、元就公以來

代々の藩主を祀る。此の地三面海を廻らし山背は斷崖絶壁にして寄り付くを得ず。前面は五重の天守閣、櫓、内濠、外濠等當時要害第一の稱ありしと雖新後藩藩奉還の魁として城郭悉くを廢毀せり。

望内には藩主自ら勤農の事に當りたる遺址を有する東園あり、此處より東方海岸の眺望は殊に住く白砂青松の曲浦瀾々菊々濱は、海水浴場として宜しきのみならず海岸一帯には元寇の折、當時築きしといふ砲臺の遺跡ある由緒あり。公園の中央には花之江亭と稱する一小亭あり、此の茶室は毛利敬親公が茶事に托して士臣を會し國事を密議し、天下に活動するの方策を定められたる所なり。當時は町内に在りしを維新後品川彌次郎氏これを此の地に移し保存せしものなりといふ。指月山は萩町に足を投ずる者の必ず先づ其の眼に映するもの。明の陳元景が、「築壘頭。拔地勢。宛然天造金城」と云へるは即ち之にして、實に萩町の一大偉觀にして彼の長門峽、秋芳湖の奇勝と共に萩町が日本に誇る地靈人傑の總起源であり、總歸結であり、更に又萩町の頭腦といふべきなり。

大日本山林大會視察旅行の總歸結も亦其の昔天造金城と稱はれ、偉人傑上の總起源、防長精神の總歸結たる指月山下に解散式を舉げ



指月山の全景

視察旅行の挿尾を飾らんとする鑿定なり。萩に於ける史蹟中、以上の外に尙見逃すべからざるものに本戸孝允侯、三浦觀樹將軍、品川彌次郎子、其他維新志士の舊邸等ありて、之等の大部は舊狀の儘、完全に保有せらる。また指月公園附近には舊藩時代の遺影たる土塀の現存せるもの頗る多く、歐洲文化の輸入と共に何れの都市に於ても此種建造物の破滅せられしに拘らず、今尙本町に於て之を見得るは懐古の念禁じ能はざるものにして、之が永久保存の方策を講じたきものなり。

にて二尋半、マダヒ・クロダヒ・クロダヒ・クロヤ・スバキ・フグ・カシヒ・エビ・ボラ・コチ・コシロ・ダナゴ・カハハギ・キ

越ヶ濱明神池 萩市街の東北端に當り海中に突出する半崎の袂にある。昔は藩主の遊園地となり一名「御茶屋の池」とも呼びたり。此の地は水面三、四〇〇坪、全國に比類なき天然鹹水池にして池水は地下を潜り外海と相通じ、干満の作用あり、水深は中央部最深所

ザミ・イサギ等近海磯附魚の大部を棲息して天然の一大水族館とも云ふべく、大正十二年内務省より天然紀念物として指定せられ又大正十年には附近の森林二町四畝十七歩を風致保安林に編入せられ、萩名勝の尤なるものたり。池を渡り嚴島明神に参拜し社殿の横側より半島の頂上、笠山に上る。約二十分にして頂上に達す、遠く日本海の紺碧を控へ、萩市街、裏日本の長汀曲浦を望み得て風景絶佳なり。笠山は海拔一一二米突、成層舊火山にして頂上には徑三〇米突、深さ二〇米突の舊噴火口あり。日本國中火山多しといふも、斯く海拔低くして小規模に火山形態を完全に備へしもの稀なりといふ。山は全部石英玄武岩の熔岩及燒岩より成り、山麓には幾多の風穴を存す。此の山にて植物學上注目すべきは寒熱兩帶の植物生育せる事にして、殊に山の東北に當る羅木林中には



笠山にて遠望 (中央高臺舊噴火口)

現在工學博士都濃豊之進氏の所有山林なり。

一〇、萩町に於ける製簾工場

本工場は昭和五年九月創立、資本金一〇萬圓にして此種工場は全國を通じて名古屋、臺中及び本工場の三箇所を算するのみ、何れも最近の創立に係り、簾骨製造上特色あるものなり。製造機械二〇臺を有し、一ヶ年資竹材消費量二萬束(六寸竹以上)職工七〇名を有し一ヶ年簾骨製品價格七萬二千圓を製造す。これが簾骨製品は大版に送り商品化されるものなり。資竹材は全部萩町及其關近町村より供給し竹林所有者を裨益する所大なり。此の附近阿武川口にして船舶の來往激しく、所謂萩港に屬

し、萩税關も近くにあり。川上村方面より日々流下する筏材、竹材等はこゝにて其の多くを陸揚げ、製材又は船舶に積込み、輪移出するものにして繁盛なり。

### 一一、釣竿工場

釣竿工場は、御船倉の直前に在り。萩町長田大助氏の經營に係り、事業開始は明治二十七年八月にして職工十二人を使用し一ヶ年間釣竿生産量三十五萬本、其價格三萬二千二百圓に達し、製品は神戸に送り、アメリカ・カナダ地方へ輸出す。資材は「マダケ」、「ホテイチク」(ゴサンチク)にして特に内地向としては「メダケ」を使用す。

### 一二、宮野村の林業

宮野村山口市に隣接し鐵道山口線宮野驛を有し、交通至便の地にあり、總面積二、〇三九ヘクタール餘、人口三、六〇〇



宮野村有林

人、村費總額三萬八千圓小村なれども山林は、臺帳面積一、五四〇餘町前にして村全面積の八割を占む内、村有林面積は一、四九〇ヘクタールに及び其の全部を擧げて明治三十五年六月國有林野の下戻を受けたるものなり。本村は既に大正二年村有林野造林案を編成し、其の經營に全力を注ぎたりしが、大正十二年檢訂施業案の樹立を見、併せて林野の整理を行ひし結果、現在に於ては次の如き整理區分をなせり。

營林地	七四二、四〇ヘクタール
柴草採取地	三三二、五九
貸付地	四一五、九二
計	一、四九〇、九六ヘクタール

今本村有林林相の概要を窺ふに、檜林及松・雜・混播林を主とし人工造林は明治三十七年以降の植栽に係り、優良なる成績を示せり。天然林は四、五年生より三十五年生の幼壯齡林より成り未だ主伐期に到達せる林分は少し

林相別	普通施業地	縣有模範林	貸付地	計
杉局拍同林	一〇五、七〇	七、七九	四九、八八	一六三、二七
松天然林	三三八、六四	五三、四一	一四、四七	五二六、五二
松雜天然林	二九八、六八		一六八、五九	四六七、二七
雜天然林			四三、二七	四三、二七
柴草採取地				三三二、五九
計	七四二、三九	一三、二〇	二七五、三二	一、四八一、九一

本村は明治三十七年事業開始以來二萬七千八百餘圓の林野事業費を投下し、新植・撫育・伐野整理・境界標の建設・林道敷設等の事業をなし、これに對して伐採収入二萬九千餘圓其他の収入一萬五千九百餘圓を擧げ、其の經營見るべきものあり。然れども事業未だ全體的には造林撫育の途中に屬し、伐採収入僅少なると今後三、四年を出でずして年收五千圓を突破するは容易にして經營の將來益々有望なる状態にあり。而して今後村有林の年收は少くとも一萬數千圓を擧げ、一戸當り毎年十數萬の村費負擔の軽減をなし得べく努力しつゝありて、現に青年團、在郷軍人會、小學兒童に至るまで全村民擧つて我等の山林として之が保護撫育に専念せるは正に他の範とするに足るべきなり。

縣有模範林 縣有模範林は明治四十一年山口縣が宮野村有

林に收益分收の方法に依り地上權を設定せしものにして、其の總面積一三一、三八ヘクタール、古きは四十年生より若きは十五年生に至る幼壯齡林分なり。其の成績優良進んで林業技術の模範を示せし爲め村有林經營を刺戟せし事大なるものあり。木模範林には其の入口近くに縣山林會の行へる間伐試験地等もあり。

常榮寺雪舟の庭 史績として内務省より指定されたる雪舟庭は宮野村常榮寺境内に在り、庭園は東、西、北の三方に圍牆を繞し、面積三千四百平方米餘、中央に心字池あり。畫聖雪舟の築きしものにして、瀧あり、山あり、巨岩あり、岩石は凡て片狀岩の輝石を用ひ、水平の層理を垂直に立てたるものにして岩角稜々雪舟派繪畫の筆勢を髣髴せしむ。

雪舟は備中赤濱の人、幼にして剃髮、諸國巡歴中、山口に來り雲谷庵にて畫に耽る。應仁元年明の南京に赴き三年にして歸國、再び山口に來り大内氏に寵せられ、畫は勿論鑄金、漆工の圖案、樂庭の設計等藝術に關する一切を彼の支配に委せ、本庭園も其樂造に成るものなりといふ。











津村昌一	林をめぐりて	〇・五〇	宮田長次郎	大日本老樹番附	〇・三〇	後藤朝太郎	支那趣味談	〇・五〇
賀田直治	山梨縣の植樹	〇・三〇	山梨縣編	山梨縣名木誌	〇・三〇	藤原銀次郎	消費經濟の合理化	〇・五〇
山本徳三郎	農學文獻目錄(第一輯)	三・五〇	大明堂編	滿洲の産業研究(原料篇)	一・五〇	三好學	最新植物學(上卷)	九・〇〇
大野史郎	農學文獻目錄(第二輯)	三・五〇	田中末廣	太平洋を環る林業座談會	三・八〇	同	同(中卷)	九・〇〇
同	農學文獻目錄(第三輯)	三・五〇	帝國森林會	國産木材	〇・〇三	同	同(下卷)	九・〇〇
農林省林業試験場編纂	著者分類目錄(第二輯)	一・〇〇	日本山林會	山林講座	〇・〇三	池野成一郎	植物系統學(上卷)	一〇・〇〇
同	林業試驗報告(第廿五號)	二・五〇	東京中央放牧場	山林講座	〇・〇三	同	植物系統學(下卷)	一〇・〇〇
同	林業試驗報告(第廿六號)	二・五〇	漆山雅喜	山にて聞いた話	一・八〇	工藤祐舞	日本有用樹木分類學	四・五〇
同	林業試驗報告(第廿七號)	一・五〇	依田秋園	山と人とを想ひて	二・三〇	仲井良之助	大日本樹木誌(第一卷)	一〇・〇〇
同	林業試驗報告(第廿八號)	一・五〇	同	悲劇・世襲山林監督	一・六〇	牧野富太郎	日本植物圖鑑	一〇・〇〇
同	林業試驗報告(第廿九號)	二・〇〇	柳田國男	山の生	二・〇〇	山内繁雄	圖解植物名鑑	四・五〇
同	林業試驗報告(第三十號)	二・〇〇	川瀬善太郎	たぬき	三・五〇	村越三千男	大植物圖鑑	二〇・〇〇
同	林業試驗報告(第三一號)	〇・五〇	同	森林の歌	〇・〇三	内田清之助	内外實用植物圖說	三・八〇
帝國森林會	海苔浜用材試驗報告	〇・三〇	帝國森林會	森林の歌	〇・〇六	内田清之助	日本動物圖鑑	一・五〇
青木繁	山は荒れ行く	二・八〇	同	森林の歌	〇・〇六	廿四氏共著	日本昆蟲圖鑑	一・五〇
同	臺灣林業の基礎知識	五・〇〇	同	森林の歌	〇・〇六	内田清之助	日本鳥類圖說(上卷)	一〇・〇〇
同	林業教育改造論	一・〇〇	青森營林局	森林の歌	〇・〇八	同	日本鳥類圖說(下卷)	一〇・〇〇
同	森林生活者の手記	一・〇〇	本多壽六	森林の歌	〇・〇八	同	日本害蟲圖說(續篇)	一〇・〇〇
同	山人放言	二・〇〇	同	處世の秘訣	〇・〇三	松村松年	日本害蟲圖說	一・〇〇
同	森を顧みて	二・八〇	同	幸福とは何ぞや	〇・〇三	山崎自編	大和根水源紀行	一・〇〇
同		二・八〇	同	成功の近道	一・〇〇	武田村久著	仙境尾瀬の景觀	一・五〇

昭和六年九月十五日印刷  
昭和六年九月十八日發行 (非賣品)

東京市赤坂區溜池町一番地  
大日本山林會内  
著作家 宮田長次郎  
發行者 東京市小石川區久野町一〇八番地  
印刷所 共同印刷株式會社  
發行所 東京市赤坂區溜池町一番地(三會堂内)  
**大日本山林會**  
(電話)青山六三三〇番  
(振替)東京五七九二番

終

